

ラグビーワールドカップ2023 フランス大会 ルールの厳格化 あくまでもフェアに

第 5 班 月報委員
細 田 俊 輔
(細田木材工業株式会社)

日本列島が熱狂に包まれた2019年から、もう4年が経過しました。

日本ラグビー史上初の快挙となるベスト8進出を果たしたジェイミー・ジャパンがフランスの大舞台の地に戻ってきた。

もしかしたら地殻変動？

ティア2の活躍、南米の活躍、フィジー、トンガ、サモアの再生。その他にも新鮮な力が爽やかに躍動感を与えた今大会。近い将来には地殻変動のあり得る状況。その中で日本が立つ位置を確認しながら観ていく大会となりました。

日本VSアルゼンチン

紙一重、勝てたかなと思ってしまう一戦だった。アルゼンチンに勝つにはフィジカル勝負。硬い選手起用をしてきたヘッドコーチのジェイミーが初めてギャンブル的な選手起用。左ウイングにフィフィタを先発させ、2つ目のトライを演出させた。

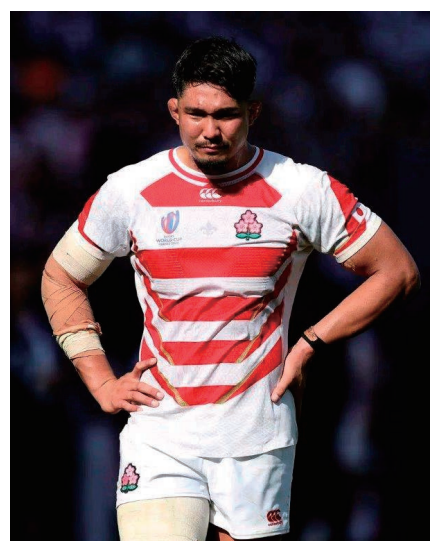
両方にミスが多い試合展開の中、ここぞという場面でアルゼンチンは日本のミスを見逃さず、一気にトライを取り切る集中力があつた。

ロックのファカタヴァが素晴らしいハンドリング・ランとキックでトライをあげ、スタンドオフ松田のゴールキックも絶好調で必死に食らいつくが、「ここから行くぞ!」というところで、引き離されてしまった。

試合終盤に差し掛かった時の選手の疲労感が、第4戦目では目についた。出ずっぱりのフォワードの動きが明らかに重たい。選手層を厚くしなければならないという2019年大会からの課題が解決されないまま、今大会に入ってしまったことが浮き彫りにされた。コロナ禍で思うように国際経験を積むことが出来なかったため若手が代表に入らず、ほぼ主力はベテランであり、どちらかと



ジョナサン・タウマテイネ(サモア) 銀髪とタトゥー。攻守ともに動きまわる。



力強く情熱でチームをけん引した姫野選手。

いうとフィットネスに頼るタイプの選手選考に思えた。時間とソースが限られた今大会は、難しかったように思えた。2027年までの課題を再確認する大会となった。

新しい息吹と壮絶なファイナル

ラグビーは他競技と違ってあまり番狂わせがなく、実力通りの結果が相場です。今回のベスト8は、世界ランキング通りにほぼ収まりました。

それでも、今回の大会は新しい息吹をいっぱい感じさせる大会となりました。

ニュージーランドと南アフリカの決勝は、最強同志が世界一をかけてすべてを出し切った歴史に残る一戦となりました。ワンプレーの重みとレッドカードの出る波乱の展開をはねのけた南アフリカが勝利！



南アフリカ・コリシ主将がウェブ・エリスカップを掲げる瞬間。

あくまでもフェアに

レフェリーだってプレーヤーだって人間で、間違える事があって当たり前。

人間のやる事、間違えがあって当たり前、間違えて学ぶ事がいっぱいある。

次、こう言うことしたらいけないよって、自分に確認して自分に言い聞かせることができるのは人間だけだ。

試合中に自分自身が何処までフェアに或いは、あくまでフェアに出来るか？

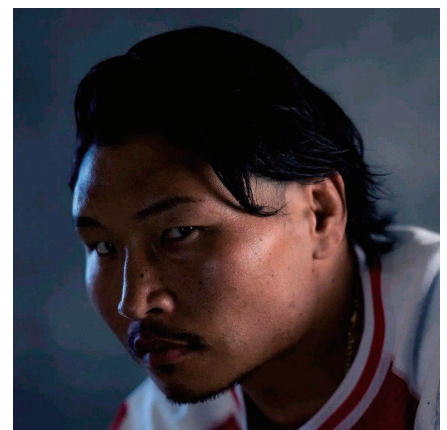
レフェリーに判定されるか、されないかの問題では無く

自分自身に問われるのが、ラグビーと言うスポーツだと思う。

最後に、静かに闘志を燃やす稲垣選手が決戦前にチームに伝えた言葉を紹介したいと思います。

侍は本来、刀を抜くのは厳しい状況だった。刀を抜いたら相手を殺す時か、自分が死ぬか。その二択しかない状況。今のチームの状況がそれにすごく似ていると思っています。自分たちはその刀を振る準備をしてきました。

今がその時です。



今大会、全4試合で先発出場を果たした稲垣選手。